

千九百三十年「ロンドン」海軍條約樞密院審査報告

## 千九百三十年「ロンドン」海軍條約御批准ノ件審査報告

今回御諮詢ノ千九百三十年「ロンドン」海軍條約御批准ノ件ニ關シ本官等審査委員タルノ命ヲ受クルヤ事態ノ關要甚タ重  
大ニシテ深ク考慮セサルヘカラサルモノアルヲ念ヒ八月十八日以來屢次會同シ具ニ國務大臣ノ辯明ヲ聽キ各員交々所見ヲ  
述ヘテ反覆審議ヲ重ネ以テ苟モ之カ查覈ニ遺闕ナカラムコトヲ期シタリ

大正十一年二月米國華盛頓ノ會議ニ於テ日、英、米、佛、伊ノ五國間ニ成立シタル海軍軍備制限ニ關スル條約ハ主力艦及航  
空母艦ニ付其ノ各國ノ保有量、單艦噸數及備砲ニ關スル制限ヲ協定シタルモ補助艦ニ付テハ單ニ其ノ單艦噸數及搭載砲口  
徑ノ制限ヲ約束シタルニ止リ其ノ各國ノ保有量ニ關シテハ何等協定スル所ナカリシニ由リ右會議後數年ナラシテ早クモ  
主要海軍國間ニ補助艦ノ建造競争漸ク著カラムトスルノ傾向ヲ見ルニ至レリ此ノ時ニ方ソ國際聯盟ハ其ノ使命ニ從ヒ陸、  
海、空ノ全般ニ亘リ軍備ノ縮少ヲ實現スル爲頻リニ努力スル所アリシモ其ノ討議ノ範圍頗ル廣汎ニシテ各國意見ノ懸隔甚  
シク具體的結果ニ到達スルコト極メテ困難ナリシニ由リ前記華盛頓會議ノ主催者タル米國政府ハ國際聯盟ニ於ケル軍備縮  
少條約ノ成立ヲ待タス主要海軍國間ニ補助艦ニ關スル制限ヲ協定スルノ急務ナルヲ認メ昭和二年二月前記ノ五國間ニ會議  
ヲ開催セムコトヲ提唱シタルニ佛、伊兩國政府ハ之ヲ受託セサリシ爲同年六月瑞西國「ジュネーヴ」ニ於テ日、英、米ノ三  
國政府間ニ商議ヲ開始シタルモ八時砲ヲ搭載スヘキ巡洋艦ニ關シ英、米兩國ノ主張ニ甚シキ徑庭アリ爲ニ右會議ハ遂ニ不  
調ニ終レリ然ルニ昭和四年ニ至リ右兩國ニ於テ一般政情ノ變化ニ伴ヒ軍備ノ縮少ヲ實現スルノ氣運急速ニ進展シ其ノ結果  
同年十月英國政府ハ日、米、佛、伊ノ各國政府ニ對シ前記華盛頓條約ニ規定セラレサル艦種ニ關スル制限ヲ考究シ併セテ  
同條約第二十一條第二項ノ規定ヲ按シ技術上及科學上ノ最近ノ發達ニ適應スル爲同條約ノ條項ニ加フヘキ變更ヲ審議スル  
ノ目的ヲ以テ英國倫敦ニ會議ヲ開催セムコトヲ提議シタリ右四國政府ハ乃チ之ニ贊同シ昭和五年一月五關係國ノ代表者同  
地ニ會合シ約三月ニ亘リテ樽俎折衝ヲ重ネ迂餘曲折ヲ盡シテ稍ク協議調ヒ千九百三十年「ロンドン」海軍條約ト稱スル

條約ヲ協定シ同年四月二十二日各國全權委員ニ於テ之カ署名調印ヲ了シタリ是レ即チ本案ノ條約ナリ  
本條約ハ前文及末文ノ外五編二十六條及第二編ニ添附セル三附屬書ヨリ成リ第一編、第二編、第四編及第五編ハ五國間ノ  
協定ニシテ第三編ハ日、英、米三國間ノ協定ナリ今其ノ各編條規ノ要旨ヲ摘錄スレハ大凡左ノ如シ

(一) 主力艦ニ關スル條規

- (イ) 各締約國ハ華盛頓條約ニ規定セル主力艦代艦起工ノ權利ヲ千九百三十一年ヨリ千九百三十六年迄ノ間行使セサルコトヲ約ス但シ不慮ノ事變ニ因リ亡失又ハ毀損シタル艦船ノ代艦ヲ建造シ又ハ佛、伊兩國カ千九百二十七年及千九百一十九年ニ起工スル權利ヲ有スル代艦ヲ建造スルハ此ノ限ニ在ラス（第一條）

(ロ) 日、英、米三國ノ現有主力艦中日本國ニ在リテハ比叡、英國ニ在リテハ「ベンボー」外四隻、米國ニ在リテハ「フロリダ」外二隻ハ此ノ際之ヲ處分スルコトシ其ノ中各國ニ付一隻ハ減勢シテ練習用ノ爲之ヲ保有スルコトヲ得ルモ其ノ他ハ專ラ標的用ニ變更セサル限り一定ノ期間内ニ之ヲ廢棄スヘキモノトス（第二條一）而シテ前項ノ特別ニ依リ佛、伊兩國ニ於テ代艦建造ノ結果處分スヘキモノ及右ノ日、英、米三國ニ於テ處分スヘキモノヲ除クノ外各締約國ハ本條約ノ有效期間中一切ノ現存主力艦ヲ保有スルコトヲ得ルモノトス（第二條二）

- (ハ) 各締約國ハ本月四月一日現存セル主力艦ニ對シ航空機著艦用ノ臺又ハ甲板ヲ裝備スルコトヲ得サルモノトス（第三條三）

(二) 航空母艦ニ關スル條規

(イ) 華盛頓條約ニ於テハ航空母艦ノ意義ヲ基準排水量一萬噸ヲ超ユルモノニ限定シタルモノ本條約ニ於テハ之ヲ改メテ排水量ノ如何ヲ問ハサルモノトシ又主力艦、巡洋艦、又ハ驅逐艦ニ航空機發著用ノ臺又ハ甲板ノ裝備アルモ該艦船カ專ラ航空母艦トシテ設計又ハ改造セラレタルニ非サル限り之カ爲航空母艦ノ艦種ニ算入セラルコトナキモノトセリ（第三條）

- (ハ) 航空母艦ノ處分ニ付テハ本條約ニ掲ケタル處分規則（第二編第二附屬書）ニ從フヘキモノトス（第十一條）

(三) 補助艦ニ關スル條規

(甲) 全締約國ノ補助艦船ニ關スル條規

- (イ) 各締約國ノ水上艦船ノ基準排水量ニ付テハ總テ華盛頓條約ニ掲ケタル基準排水量ノ決定ニ關スル規則（同條約第二章第四節）ヲ適用スルコトシ（第六條一）潛水艦ノ排水量ニ付テハ新ニ之ヲ決定スヘキ規則ヲ設ク（同條二）

(ロ) 各締約國ハ潛水艦ニシテ二千噸ヲ超ユルモノ又ハ五・一時ヲ超ユル砲ヲ有スルモノヲ取得シ又ハ建造シ若ハ建造セシムルコトヲ得ス（第七條一）且本條約カ一切ノ締約國ニ付實施セラル時ヨリ何レノ締約國ノ法域内ニ於テモ之ヲ建造スルコトヲ得サルモノトス（同條四）但シ各締約國ハ二千八百噸ヲ超エス且六・一時ヲ超ユル砲ヲ有セナル百八十噸ノ既成ノ潛水艦ヲ以テスルコトヲ得又各締約國ハ本年四月一日現存ノ二千噸ヲ超エサル潛水艦ニシテ五百噸以下ノ水上戦闘艦船、二千噸以下ニシテ一定ノ特性ヲ有セサルモノ及特ニ戰闘艦船トシテ建造セラレタルニ非サル水上艦船ニシテ艦隊要務ノ爲若ハ軍隊輸送船トシテ使用セラレ又ハ戰闘艦船トシテノ用途以外ニ使用セラレ且一定ノ特性ヲ有セサルモノハ特別ノ協定アル場合ヲ除クノ外等ノ制限ヲ受クルコトナキモノトス（第八條）

- (ハ) 一萬噸ヲ超エサル艦船ノ代換ニ付テハ本條約ニ掲ケタル代換規則（第二編第一附屬書）ニ從フヘキモノトシ（第

九條) 右艦船ヲ種別シテ其ノ艦齡超過ト爲ル時期ヲ竣工後一萬噸ヲ超エサル水上艦船ニ付テハ十六年又ハ二十年、三千噸ヲ超エサル水上艦船ニ付テハ十二年又ハ十六年、潛水艦ニ付テハ十三年トシ原則トシテ各艦船ハ艦齡超過ト爲ルニ先チ之ヲ代換スルコトヲ得ナルモノトス(第一附屬書代換規則)

(ホ) 各締約國ハ本條約ノ實施後締約國ニ依リ又ハ締約國ノ爲ニ起工又ハ竣工セラレタル補助艦船ニシテ制限ヲ受ケナル艦船ニ非ナルモノニ付其ノ起工又ハ竣工ノ日ヨリ各一月以内ニ他ノ締約國ニ對シ一定事項ノ通知ヲ爲スヘキモノトス(第十條)

(ヘ) 本條約ニ依リ處分スヘキ一切ノ補助艦船ノ處分ニ付テハ本條約ニ掲ケタル處分規則ニ從フヘキモノトシ艦船ノ處分方法及其ノ實行時期ヲ定ム(第十一條及第二編第二附屬書)

(ト) 第二編第三附屬書ニ掲ケタル各締約國ノ特殊艦船ハ制限噸數中ニ算入セラルコトナクシテ之ヲ保有スルコトヲ得ルモ(第十二條) 右特殊艦船ノ保有ノ目的タル用途ニ充ツル爲將來建造、改造又ハ取得セラルモノハ各々其ノ特性ニ從ヒ制限噸數中ニ算入セラルヘキモノトス(同條二) 尚日本國ニ於テハ一千九百三十六年十二月三十一日前ニ右特種艦船中ノ阿蘇外一隻ヲ排水量五千噸速力二十「ノット」以下ノ新艦二隻ニ依リ代換スルコトヲ得ヘク右新艦モ之ヲ特殊艦船ト看做シ制限噸數中ニ算入セス(同條三) 又特殊艦船タル淺間外四隻ハ球磨級ノ最初ノ艦船三隻カ新艦ニ依リ代換セラレタルトキ之ヲ處分スヘク右球磨級ノ艦船三隻ハ一定ノ減勢ヲ施シ練習艦トシテ之ヲ使用スルコトヲ得ルモノトス(同條四)

(乙) 日、英、米三國ノ補助艦船ニ關スル條規

(イ) 日、英、米三國ノ海軍戰鬪艦船ニシテ主力艦、航空母艦及制限ヲ受ケサル艦船以外ノモノハ本條約ノ有效期間中本項ニ記述スル制限ヲ受クヘキモノトス(第十四條)

(ロ) 主力艦又ハ航空母艦以外ノ水上艦船ニシテ千八百五十噸ヲ超ユルモノ又ハ五・一時ヲ超ユル砲ヲ有スルモノヲ巡

洋艦、其ノ他ヲ驅逐艦トシ、巡洋艦中六・一時ヲ超ユル砲ヲ有スルモノヲ甲級、其ノ他ヲ乙級ト定ム(第十五條)  
(ハ) 右三國ノ千九百三十六年十二月三十一日ニ於ケル巡洋艦、驅逐艦及潛水艦ノ保有量ノ最大限ハ

(1) 甲級巡洋艦

日 本 國	十萬八千四百噸	十二隻
英 國	十四萬六千八百噸	十五隻
米 國	十八萬噸	十八隻

(2) 乙級巡洋艦

日 本 國	十萬四百五十噸
英 國	十九萬二千二百噸
米 國	十四萬三千五百噸

(3) 驅逐艦

日 本 國	十萬五千五百噸
英 國	十五萬噸

(4) 潛水艦

日 本 國	五萬二千七百噸
英 國	五萬二千七百噸

トシ(第十六條一及二) 右何レカノ艦種ニ於ケル合計噸數ヲシテ右制限ヲ超過スルニ至ラシムル艦船ハ右期日迄ニ

漸次之ヲ處分スヘキモノトス（同條二）

右補助艦船ノ各艦種保有量ノ最大限ヲ通計スレハ

日 本 國	三十六萬七千五十噸
英 國	五十四萬千七百噸
米 國	五十二萬六千二百噸

ニシテ其ノ比率ニ於テ日本國ハ英國ニ對シ六割七分七厘五毛、米國ニ對シ六割九分七厘五毛ナリ

(二) 各國ハ驅逐艦ノ割當合計噸數ノ一割六分以内ニ限リ千五百噸ヲ超ユルモノヲ以テ充當スルコトヲ得ヘク（第十六條四）又巡洋艦ノ割當合計噸數ノ二割五分以内ニ限リ之ニ航空機著艦用ノ臺又ハ甲板ヲ裝備スルコトヲ得ルモノトス（同條五）

(ホ) 乙級巡洋艦ト驅逐艦トノ間ニ於テハ融通ヲ受クヘキ方ノ艦種艦級ノ割當合計噸數ノ一割以内ニ限リ相互ニ融通ヲ行フコトヲ得ルモノトス（第十七條）

(ヘ) 米國ハ甲級巡洋艦ノ保有量十八隻總噸數十八萬噸中十五隻總噸數十五萬噸ハ千九百三十五年迄ニ竣工スルノ意圖ヲ有シ其ノ餘ノ三隻ニ付テハ其ノ各隻ニ代フルニ乙級巡洋艦一萬五千六十六噸ヲ以テスルノ選擇權ヲ有シ若シ此ノ選擇權ノ全部ヲ行ハサルトキハ甲級巡洋艦ノ第十六隻、第十七隻、第十八隻ハ夫々千九百三十三年、千九百三十四年、千九百三十五年前ニハ起工セス千九百三十六年、千九百三十七年、千九百三十八年前ニハ竣工セシメナルモノトス（第十八條）

(ト) 前記ノ各艦種ニ於ケル起工噸數ハ本則トシテ當該艦種ノ最大割當噸數ニ達スル爲ニ又ハ千九百三十六年十二月三十一日前ニ艦齡超過ト爲ル艦船ヲ代換スル爲ニ必要ナル量ヲ超ユルコトヲ得ス但シ各國ハ千九百三十七年乃至千九百三十九年ニ艦齡超過ト爲ル巡洋艦及潛水艦並千九百三十七年及千九百三十八年ニ艦齡超過ト爲ル驅逐艦ノ代換噸

數ニ對シ新艦ノ起工ヲ爲スコトヲ得ルモノトス（第十九條）茲ニ所謂艦種ノ意義ニ關シ米國政府ハ之ヲ艦種又ハ艦級ノ義ト解スヘク從テ巡洋艦ノ甲級又ハ乙級ノ孰レカニ於テ艦齡超過ト爲ル艦船ハ當該艦級内ニ於テノミ之ヲ代換スルコトヲ得ルモノト解スヘキ旨ヲ提唱シ帝國政府及英國政府ハ之ニ同意シ關係國政府代表者間ニ之ニ關スル書翰ヲ交換セリ

(チ) 前記ノ代換ニ關スル一般規程（第二編第一附屬書）ニ對シ特例トシテ英國ハ巡洋艦二隻ニ付艦齡超過前ノ線上處分ヲ爲シ日本國ハ巡洋艦、驅逐艦及潛水艦ノ一部ニ付代換ノ線上起工及竣工ヲ爲スコトヲ認ム（第二十條）

(リ) 三國ノ中ノ一國カ三國以外ノ國ノ新艦建造ニ因リ自國ノ安全ニ重大ナル影響ヲ受ケタリト認ムルトキハ該艦船ノ艦種ノ一又ハ二以上ニ於テ自國ノ噸數ヲ增加スルノ權ヲ有スヘク此ノ場合ニ於テハ他ノ二國モ亦之ニ比例シテ自國ノ噸數ヲ增加スルノ權利ヲ有スルモノトス（第二十一條）

#### (四) 潛水艦其ノ他ノ軍艦ノ行動ニ關スル條規

潛水艦其ノ他ノ軍艦ノ商船ニ對スル戰時行動ノ制限ニ關シテハ往年華盛頓會議ニ於テ日、英、米、佛、伊ノ五國間ニ協定シタル潛水艦及毒瓦斯ニ關スル五國條約中ニ規律スル所アリタルモ該條約ハ未タ佛國ノ批准ヲ得ス終ニ效力ヲ生スルニ至ラサルヲ以テ茲ニ本條約ヲ以テ之ト類似ノ條規ヲ協定シタリ即チ締約國ハ潛水艦ハ商船ニ對スル行動ニ關シテハ水上艦船ト同一ノ國際法ノ規則ニ從フヘキコト茲水上艦船タルト潛水艦タルトヲ間ハス軍艦ハ商船カ正當ニ停船ヲ要求セラレタルニ拘ラス頑強ニ之ヲ拒否シ又ハ臨檢若ハ搜索ニ對シ積極的ニ抗拒スル場合ヲ除クノ外乗客、船員及船舶書類ヲ安全ナル場所ニ移シタル後ニ非サレハ商船ヲ沈没セシメ又ハ航海ニ堪ヘサルモノト爲スコトヲ得ス而シテ當時ノ海上及天候ノ狀態ニ於テ陸地ニ近接セルカ又ハ附近ニ乗客及船員ヲ收容シ得ル他ノ船舶カ存在スルニ因リ右乗客及船員ノ安全カ確保セラルルニ非サレハ船ノ端艇ハ安全ナル場所ト看做スヘカラサルコトヲ國際法ノ確立セル規則トシテ受諾シ且他ノ一切ノ國ニ對シ右規則ニ同意セムコトヲ勸誘スヘキ旨ヲ定メタリ（第二十二條）

## (五) 其ノ他ノ條規

(イ) 本條約ハ昭和十一年即チ千九百三十六年十二月三十日迄效力ヲ有スヘキモノトス但シ潛水艦其ノ他ノ軍艦ノ行動ニ關スル條規ハ無期限ニ、航空母艦ニ關スル條規ハ華盛頓條約同一ノ期間内效力ヲ有スヘキモノトス而シテ締約國ハ其ノ全部カ加盟スヘキ一層一般的ナル海軍軍備制限協定ノ成立セサル限り本條約ニ代リ且其ノ目的ヲ遂行スヘキ新條約ヲ作成スル爲千九百三十五年ニ會議ヲ開催スヘキモノトス但シ本條約ノ何レノ規定モ該會議ニ於ケル各締約國ノ態度ヲ妨クルコトナキモノトス（第二十三條）

(ロ) 本條約ハ各締約國ニ於テ其ノ憲法上ノ手續ニ從ヒ之ヲ批准シ其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ倫敦ニ於テ之ヲ寄託スヘキモノトス（第二十四條一）而シテ日、英、米三國ニ付テハ其ノ全部ノ批准書ノ寄託アリタル日ヨリ本條約ノ全部ヲ實施シ（第二十四條二）佛、伊兩國ニ付テハ右實施ノ日ニ於テ既ニ其ノ批准書ノ寄託書ナルトキハ同日ヨリ、然ラサルトキハ右兩國ノ各ニ付其ノ批准書ノ寄託アリタル日ヨリ本條約第三編以外ノ諸編ヲ實施スヘキモノトス（第二十四條三）日、英、米三國ノ補助艦船ニ關スル條規ヨリ生スル權利義務ハ專ラ該三國ニ關スルモノニシテ其ノ佛、伊兩國トノ關係ニ於ケル相互ノ權利義務ニ付テハ全締約國間ニ於テ更ニ協定ヲ爲スヘキモノトス（第二十四條四）尙全締約國ノ批准書寄託後英國政府ハ本條約中潛水艦其ノ他ノ軍艦ノ行動ニ關スル條規ヲ他ノ一切ノ國ニ通知シ之カ加入ヲ勧誘スヘク其ノ加入ハ同國政府ニ宛テタル宣言書ニ依リ之ヲ行フヘキモノトス（第二十五條）

本條約ノ成立ノ經過及其ノ條項ノ解説ニ付テハ別冊外務省作成ニ係ル『千九百三十年「ロンドン」海軍條約説明書』其ノ他ノ參考書類ヲ併セテ參照セラレムコトヲ請フ

本條約成立ノ經過ヲ顧ルニ倫敦會議ノ開催ニ臨ミ帝國政府ハ既定ノ國防方針ニ基キ（一）補助艦ノ總括噸數ハ對米比率七割（二）大巡洋艦ノ噸數ハ對米比率七割（三）潛水艦ハ我カ現有量七萬七千八百餘噸ヲ保有スヘキコトノ三大原則ヲ定メ之カ主張ヲ貫徹スヘキコトヲ以テ全權委員ニ訓令シ國內ニ聲明スル所アリタルニ拘ラス帝國全權委員ハ右會議ニ於テ折衝意ノ如ク

ナラス終ニ讓歩ノ結果稍ク米國ノ提案ニ基ク所謂假妥協案ヲ作成シ之ヲ以テ政府ニ請訓シ政府カ大體ニ於テ之ヲ承認スル回訓ヲ爲シタルニ因リ茲ニ該案ヲ骨子トスル本條約ノ成立ヲ見ルニ至リタルモノニシテ即チ本條約ニ依レハ帝國ハ補助艦總括保有量ニ於テ對米六割九分七厘五毛、大巡洋艦保有量ニ於テ同六割二厘二毛ヲ協定シ潛水艦ニ於テ現在ノ約三分ノ一ノ二萬五千百餘噸ヲ減シタル五萬二千七百噸ヲ保有セムトスルニ過キス是ニ於テ本條約ニ伴フ國防缺陷問題、回訓當時ニ於ケル政府ノ措置等ニ關シ朝野幾多ノ論議ヲ醸シ現ニ最近ノ第五十八回帝國議會ニ於テモ問題ト爲リ喧囂ヲ極メタリ本官等ハ特ニ慎重ナル態度ヲ以テ本案ノ審査ニ從事シ種々ノ點ヨリ攻究スルコトヲ努メ回ヲ累ネテ當局大臣トノ間ニ質問應答ヲ盡シタリ今其ノ概要ヲ摘記スレハ左ノ如シ

一、從來御諮詢案件ニ關スル外交文書ニハ頻々誤謬アリ本案ノ條約ニ付テモ原文中ニ數多ノ誤寫アリタル爲内閣ニ於テ經伺ノ上之カ訂正ノ手續ヲ了シタリ此ノ如キハ畢竟事務取扱上ノ疎漏ニ出ツルモノニシテ頗ル遺憾トスヘキ所ナルヲ以テ此ノ點ニ付當局大臣ノ所見ヲ質シタルニ當局大臣ニ於テモ遺憾ノ意ヲ表シ將來注意ヲ加ヘ努メテ過誤ナキヲ期スヘキ旨ヲ陳ヘ尙伊太利全權委員ノ氏名ノ脱字ハ原本ノ誤謬ニ由ルモノニシテ訂正スルコト能ハサルヲ以テ其ノ儘之ヲ處理スルノ外ナカルヘシト附言セリ

二、本條約ノ調印ニ先チ我カ全權委員ヨリノ請訓ニ對シ内閣ニ於テ回訓ヲ發スル際海軍軍令部長ノ同意ヲ經タリヤ否ヤハ事手續ニ關スト雖國法上極メテ重要ナル問題タリ然ルニ内閣ハ右ノ手續ヲ經スシテ回訓ヲ發シタリト喧傳セラレ海軍部内ノ紛議ヲ來シ曩日ノ帝國議會ニ於テ所謂統帥權問題ナルモノヲ生スルニ至レリ其ノ後海軍大臣ハ海軍兵力ニ關スル事項ハ從來ノ慣行ニ依リ之ヲ處理スヘク此ノ場合ニ於テハ海軍大臣海軍軍令部長間ニ意見一致シアルヘキモノトノ允裁ヲ仰ギ裁可ノ後内閣總理大臣ニ對シ之ヲ報告シ且今後共ニ據ルヘキ旨ノ照會ヲ爲シ内閣總理大臣ニ於テ之カ受領ヲ回答シタルノ事實ハ海軍大臣ノ提示シタル文書ニ依リテ明瞭ト爲レリ仍テ本官等ハ此ノ問題ノ真相ヲ究明スルノ極メテ肝要ナルヲ念ヒ先ツ當時ノ海軍大臣事務管理タリシ内閣總理大臣ハ兵力量ノ協定ヲ其ノ内容トスル右回訓案ニ付初ヨリ軍令

部長ノ同意アルヲ必要ト思惟シタルカラ質問シタルニ同大臣ハ從來ノ慣行ヲ重シ兩者ノ間ニ意見ノ一致アルヲ必要ト思惟シタル旨ヲ以テ答辯セリ次テ事實果シテ右兩者ノ間ニ意見ノ一致アリタリヤトノ質問ニ對シテハ軍令部長ハ當初我カラ大原則ハ作戰計畫上最小限度ノ要求ナルカ故ニ此ノ要件ヲ充ナサル米國案ヲ骨子トスル兵力量ニ對シテハ軍令部長ハ當初我カラ責任者トシテ同意シ難キ旨ヲ主張シタルモ其ノ後ニ於ケル諸般ノ事情ニ照ストキハ回訓ニ際シ政府ノ處置ニ對シテハ結局同官ニ異議ナカリシモノト認メタリトノ答辯アリタリ然レトモ本官等ハ右ノ答辯ニ幾多ノ疑念ヲ抱キ親シク前軍令部長ノ陳述ヲ聽カムト欲シ内閣ニ對シ其ノ出席説明ノ手續ヲ執ラムコトヲ要求シタルモ内閣ハ之ヲ拒絶セリ又本官等ハ此ノ問題ニ關スル議會ノ質問ニ對シ國務大臣ハ軍部ノ意見ヲ斟酌シ政府ニ於テ決定シタルト答辯シ故ラニ同意又ハ意見一致ト言ハサリシ理由如何ト質問シタルニ對シ内閣總理大臣ハ軍令部トノ關係ノ内容ハ議會ニ於テ詳説スルコト好マシカラスト思惟シタルカ爲斟酌シタリト答ヘタル旨ヲ辯明セリ尙本條約ノ調印ニ臨ミ海軍大臣タル財部全權委員ハ條約案ノ内容ニ付海軍軍令部長ニ異議アリト思惟セサリシヤトノ質問ニ對シ海軍大臣ハ當時海軍軍人ニ若干ノ不滿アリタルコトハ之ヲ知レルモ彼等ト雖會議ノ決裂ヲ賭シテ迄モ反對スルモノニ非サルヘシト思惟シタリト答辯セリ依テ然ラハ何故ニ軍令部長ノ意思ヲ確ムルノ舉措ニ出テサリシカト反問シタルニ同大臣ハ政府ニハ海軍大臣事務管理ノ存スルアリ自分ハ唯全權委員ノ一人トシテ政府ノ訓令ニ從ヒ調印シタルノミ加之回訓當時受領セル軍令部長發ノ電報ニ由リ寧ロ同部長ハ回訓案ニ同意セルモノト解シタル旨ヲ以テ答辯セリ

三、政府カ我國防ニ要スル一部兵力量ノ最小限度ト主張セル所謂三大原則ニ適合セナル妥協案ヲ承認シタル事情ニ關シ政府ハ固ヨリ該案ノ其ノ意ニ満タサル廉アルヲ認ムルモ前來交渉ノ經過ニ徵シ他ニ適當ナル協定ヲ得ルノ見込ナク萬一會議決裂ノ場合其ノ帝國ノ國際的立場ニ及ホス影響ノ容易ナラサルコト及造艦競争ニ因ル帝國財政經濟上ノ苦難ノ甚シカルヘキコト等ニ想到シ即チ國家ノ大局ヨリ見テ之ヲ承認スルノ外ナキモノト思惟シタル旨ヲ辯明セリ然ラハ本條約ニ依ル兵力量ヲ以テシテ帝國國防ノ安全ヲ期スルコトヲ得ルヤ否ヤ之ヲ當局大臣ニ質問シタルニ當局大臣ハ右兵力量ヲ以テシテ補正シ得ルノ途ナキニ非スト答辯セリ

四、本條約ノ規定ニ依リ米國カ大洋巡洋艦十八隻ヲ保有スルコトセハ千九百三十六年後二三年ノ間大洋巡洋艦ニ於テ帝國ノ對米比率ハ著シク遞減シテ我國防上最モ不安ヲ來スヘシ殊ニ恰モ其ノ際支那問題ニ關シ日米間ニ事端ヲ發生スルノ虞アルヘシトノ說ナキニ非ス本官等ハ此ノ點ヲ憂慮シ當局ノ所見ヲ質シタルニ當局大臣ハ本條約滿期直後ニ備フル爲ニハ規定ノ許ス範圍内ニ於テ豫め準備ヲ整へ且滿期後新艦ノ建造ヲ促進スルニ於テハ艦ヲ比率ヲ増嵩セシムルコトヲ得ヘク其ノ間ニ於テ米國カ帝國ニ對シテ事ヲ構フルノ虞アルモノトハ思考セラレス殊ニ本條約ノ締結ニ因リ國交一層圓滿ト爲ルヘキヲ以テ戰爭ノ憂ナカルヘシト辯明セリ

五、當局ハ本條約ニ依ル兵力量ノ不足ヲ次回會議ノ結果ニ依リ補充シ得ルカ如クニ説明スト雖帝國ハ既ニ一タヒ華盛頓會議ニ於テ主力艦ノ保有量ニ付對米七割ヲ要求シテ容レラレスニタヒ今次ノ倫敦會議ニ於テ大巡洋艦ノ保有量ニ付七割及潛水艦ノ現有量維持ヲ要求シテ亦失敗ニ終レリ此ノ如クニシテ次回ノ會議ニ臨マハ益々同様ノ主張ヲ貫徹スルニ困難ヲ來スヘキハ之ヲ想像スルニ難カラス殊ニ本條約第二十三條但書ハ法理上全然無意味ノ規定ナルカ如キノミナラス同條ノ本文ニ依レハ千九百三十五年ノ會議ノ開催ハ軍備制限縮少ノ漸進的實現ヲ遂行スル爲新條約ヲ作成スルニ在ルヲ以テ軍備擴張ト認メラルカ如キ右ノ主張特ニ潛水艦ノ保有量ヲ增大スルノ要求ハ同條ノ精神ニ反ストセラレ之ヲ貫徹スルコ

ト能ハサルノ虞ナキヤ仍テ此ノ點ニ關スル不審ヲ質シタルニ當局大臣ハ次回ノ會議ニ於テ帝國ハ必シモ從前ノ三大原則ヲ主張セサルヘカラサルニ非ス今後數年間ニ於ケル諸般事情ノ變化ヲ斟酌シ最善ノ方策ヲ立テ之カ主張ノ貫徹ニ努力スヘク又假ニ所謂三大原則ノ主張ヲ繰返ストスルモ補助艦ノ總噸數及建造費額ニ於テ本條約ニ依ルモノヲ超過セサルヘキニ由リ之ヲ以テ直ニ軍備擴張ト目スヘキニ非スト答辯セリ

六、本條約ニ依ル兵力量ニハ缺陷アルヲ以テ適當ナル補充計畫ヲ立ツルニ非サレハ我カ國防ノ安全ヲ期シ得サルヘキコトハ政府ノ自ラ認ムル所ナリ然ラハ右補充計畫ノ成否如何、之ニ要スル費額如何、本條約ニ因テ生スヘキ剩餘金如何並國民負擔輕減ノ有無及其ノ程度如何ノ問題ハ本條約ノ目的ヲ達成シ得ルヤ否ヤ判断スル上ニ於テ極メテ重要ノ事項ニ屬シ正ニ審査ノ要目タルニ由リ其ノ大綱ノ提示ヲ要求シタリ然ルニ之ニ對スル當局大臣ノ辯明ハ國防補充計畫ハ尙海軍軍令部ニ於テ調査中ニ係ルヲ以テ該調査完了シ海軍省トノ間ニ意見一致シタル後更ニ關係省間ニ協議ヲ累スルニ非サレハ右條約實施ノ結果財政上相當ノ餘裕ヲ生スヘキヲ以テ其ノ一部ハ之ヲ國防ノ缺陷補充ニ充テ他ノ一部ハ之ヲ國民負擔ノ輕減ニ充ツルノ方針ナルコトヲ茲ニ責任ヲ以テ言明スヘシ而シテ海軍ノ既定計畫トシテ昭和五年度ヨリ同十一年度迄ノ財政計畫ニ留保シタル金額總計約五億圓ヲ假ニ基礎トシテ考フルトキハ本條約ニ依ル代艦建造ノ權利ヲ全部行フモ尙若干ノ剩餘金ヲ生スヘキヲ以テ之ヲ適當ニ國防補充費ト減稅トニ安排スルノ胸算ナリト謂フニ在リ

按スルニ本案ノ條約ハ華盛頓條約ヲ訂補シ蓋々海軍軍備制限ノ目的ヲ達成スル爲各種ノ艦船ニ關シ諸般ノ制限ヲ協定セムトルモノナリ抑々國防ノ安危ハ國家興亡ノ繫繫所ナリ故ニ條約ヲ以テ軍備ノ制限ヲ約諾スルカ如キハ最モ慎重ナル考慮ヲ要スルノ事項タリ由來我國軍事ニ關シテハ軍政ト軍令トヲ區別シ各々別異ノ機關ヲ設ケテ之ニ關スル大權行動ノ輔翼ニ協力セシムルモノ洵ニ以ナキニ非サルナリ然ルニ今回本條約調印ノ際内閣ノ執リタル回訓決定ノ手續ニ關シ海軍部内ニ紛議ヲ生シ惹テ世間ニ物議ヲ釀スニ至リタルハ頗ル遺憾トスヘキ所ナルモ内閣ニ於テ右回訓決定ノ際軍令部長ニ異議ナカリ

シモノト認メタリトノ答辯アリタルノミナラス尙海軍大臣ヨリ海軍ノ兵力ニ關スル事項ノ決定ハ海軍大臣海軍軍令部長間ノ意見一致ヲ要件トスルコトノ勅裁ヲ仰キ裁可ノ後内閣總理大臣ニ報告シ今後共之ニ據ルヘキ旨ノ照會ヲ爲シ同大臣ヨリ受領ノ回答ヲ得タルヲ以テ今ヤ所謂統帥權問題ナルモノハ更ニ討究スルノ必要ナキニ至レリ是レ本官等ノ頗ル欣幸トル所ナリ本條約ノ目的ヲ見ルニ其ノ世界ノ平和ヲ念トシ競争的軍備ニ伴フ危險ヲ防止シ且負擔ノ輕減ヲ圖ラムトル趣旨ニ於テハ勿論何人ト雖之カ賛同ヲ吝ムヘキニ非斯唯帝國ノ關スル限り本條約所定ノ兵力量ニ由リ果シテ能ク國防ニ缺陷ヲ生スルコトナクシテ右ノ目的ヲ達成スルコトヲ得ヘキヤ否ヤ是レ本案條約ノ可否ヲ判定スルニ最モ重要ナル論點ナルカ故ニ本官等ハ之ニ關シ特ニ縝密ナル調査ヲ試ミタリ然ルニ當局大臣ハ本條約所定ノ兵力量ニ於テハ缺陷アルコトヲ認ムルモ之カ補充ノ方法ヲ講スルニ由リテ略國防ノ安全ヲ期シ得ヘシト爲シ其ノ補充計畫ニ至ソテハ未タ調査完了セサルノ故ヲ以テ其ノ大綱要目ヲモ示サス從テ之ニ要スル費額及減稅額ノ見込ニ付テモ多ク説明ヲ與ヘス唯政府ノ責任ヲ以テ國防ノ缺陷ヲ補充シ且相當ノ減稅ヲ行フヘキ旨ヲ言明セリ然レトモ本官等ハ國防ノ補充計畫ハ本來國務大臣ト軍令機關トノ合意ニ由リテ立案セラルヘキモノニシテ獨リ國務大臣ノ責任ニ於テ言明シ得ヘキモノニ非サルカ故ニ該問題ニ付テハ寧ロ帷幄機關ノ意見ハ本官等ノ判斷ヲ下スニ有力ナル資料ト爲ルヘキヲ思ヒ何等カノ方法ニ依リテ之カ意見ヲ聽カムコトヲ切望シ最後ニ軍事參議院ノ奉答文ヲ呈示スルノ手續ヲ執ラムコトヲ國務大臣ニ請求シタルニ大臣ハ之ヲ拒絶セリ元來外務大臣ノ説明ニ依レハ本條約ハ米國ニ於テ既ニ之カ批准ノ手續ヲ了シタルモ英國ノ批准ハ愛蘭ニ關シ本年十一月以後ニ到ラサレハ完了セサルカ故ニ假ニ帝國カ今日之ヲ批准スルモ直ニ其ノ效力ヲ發生セサルヘキヲ以テ本官等ハ本條約締結ノ結果カ帝國ノ利害ニ及ホス影響ノ甚大ナルニ稽ヘ暫ク假スニ時日ヲ以テシ前記ノ國防補充計畫等ニ付キ當局ノ調査完了スルヲ俟テ徐ニ審議ヲ進ムルノ寧ロ妥當ナルヲ思ヒ之ヲ當局大臣ニ提議シタルモ之亦其ノ同意スル所ト爲ラススノ如キハ潛思凝慮ヲ任トスル本官等ノ甚タ遺憾トル所ナルモ國務大臣ノ説明スル所ニ依レハ近時國內ノ情勢大ニ憂慮スヘキモノ現レ本條約批准ノ成否永ク未定ナルトキハ政治上經濟上不安ヲ惹起シテ社會ニ及ホス影響多大ナルモノアルヘキカ故ニ本官等ハ今日ノ場合

此ノ問題ニ付テハ如上審査ノ程度ニ於テ結局當局ノ言責ニ信賴シテ決議ヲ爲スノ外ナキモノト斷定スルニ至レリ其ノ他本條約ノ條項ニ關シテハ大體ニ於テ支障ノ廉ナシト認ムルヲ以テ此ノ際本條約ヲ承認スルノ最終ノ決定ヲ與ヘラルコト蓋シ已ムヲ得サル所ナリト思料ス仍テ審査委員會ニ於テハ本院ハ國務大臣カ軍部ト協調ヲ整ヘ國防ノ補充計畫ヲ遂行シ且國民負擔ノ輕減ヲ實行シテ本條約ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナキヲ期ストノ言責ニ信賴シテ本件ヲ可決スヘキモノト全會一致ヲ以テ議決シタリ

右審査ノ結果ヲ報告ス

昭和五年九月二十六日

審査委員長

樞密顧問官 伯爵伊東巳代治

審査委員

樞密顧問官 子爵金子堅太郎

樞密顧問官 男爵久保田

樞密顧問官 男爵山川健次

樞密顧問官 侯爵黒田長成郎

樞密顧問官 男爵田健治

樞密顧問官 荒井賢太郎

樞密顧問官 水町袈裟六郎

樞密院議長 男爵倉富勇三郎殿

千九百三十年「ロンドン」海軍條約樞密院本會議議事要錄

(昭和五年十月一日)